

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 月 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	河本悠吾

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
北海道目梨郡羅臼町
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
羅臼シャチ調査実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 6 月 29 日 ~ 平成 28 年 7 月 4 日 (6 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
野生動物研究センター 山本友紀子氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
北海道・羅臼では、海洋生物であるシャチの生態を明らかにするために調査が行われている。本実習の目的は、その調査に同行させていただくことでシャチの生息環境や行動、またそれらを明らかにするための研究手法について学ぶことである。
日程 6/29 移動(犬山→羅臼) 6/30-7/3 調査 7/4 移動(羅臼→犬山)
一日目 早朝 5 時半に出港し、まず出会ったのはカマイルカであった。カマイルカは今シーズン初観測だったらしく、数頭が観察できた。しばらく船の周りを泳いでいたが、彼らの動きに加え私の観察の不慣れさから、はっきりと姿を確認できた時間は長くなかった。 私たちが調査に参加する前日に、三個体に発信機を取り付けることに成功したようで、発信機からの信号をもとに探していた。そのため、午前中には念願のシャチを見ることができた。大きな背びれを海面に出して泳ぐ姿はとても迫力があつた。シャチは背びれの左側の傷などから個体識別をしている。後から個体を確認するため、背びれの左側を写した写真を撮った。 初日に大変だったのが船酔いである。予め酔い止めは飲んで臨んだが、途中で効果が切れてしまい、午後からの観察は難しかった。
二日目 この日は天気も波も四日間で一番よく、観察には最適であった。船の真横や真下を泳ぐことが多々あり、かなり近くで観察できた。海面から顔を出して周囲を見回すスパイホップやブリーチングと呼ばれる大きなジャンプなどのダイナミックな行動が確認できた。知床半島をバックに優雅に泳ぐシャチの姿は大変美しかった。宿に戻ると、宿の裏で大きなエゾシカに遭遇した。
三日目 この日出会った群れは船を避けているようであった。こちらがシャチを見つけて近づくと潜ってしまった。一度潜ると 5 分ほどは水面に出てこないため、出てきたときにはかなり遠くに行ってしまった。この日は霧が濃かったため、潜られるとその後再発見することは難しかった。 午後からはかなり接近して観察することができた。シャチもこちらに興味を持っているようで、スパイホップで何度もあたりを見回したり、仰向けのまま船に接近し並走することもあつた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

四日目

この日は一度もシャチには出会えなかった。前夜の天気が悪かったため波が高く、船は大きく揺れていた。今回の調査は発信機のおかげで簡単に会えていたが、あれだけ出会えるほうが珍しいのかもしれない。広い海の中で動物を探すということがどれだけ難しいか、この日実感できた。

四日間の調査で、これまで自分の知らなかったシャチの行動を見ることができて感動すると同時に、海洋生物の謎を明らかにすることがいかに難しいか痛感した。我々が観察できるのは海面より上の行動のみであり、潜水中の行動は観察できないからである。観察が難しいからこそ、様々な方法や機材を駆使して研究を行う必要があるのだと感じた。



水中のシャチ



知床半島とシャチ



恐らく親子



宿の裏で出会ったエゾシカ



スパイホップであたりを見回す



仰向けで船の横を泳ぐシャチ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS の支援により行われました。また、山本友紀子氏をはじめ、研究チームのみなさま、観光船はまなすの船員の方々には大変お世話になりました。感謝申し上げます。